

巻 頭 言

2015年度は、大学執行部新体制も2年目を迎え、本センターもその流れの中で比較的落ち着いた歩みを見せた年度と言えるかもしれません。

本センターが抱える2つの部門、こころの支援研究部門（心理教育相談室含む）、そだちの支援研究部門（発達支援相談室含む）は、本年度も地域貢献の一環として着実な相談活動を行ってきました。昨今は、発達支援相談室のみならず、心理教育相談室も発達障害に係る相談が増えています。これも現代の教育・社会情勢を反映しているのでしょうか。平成24年に発表された文部科学省の調査では、通常の学級に在籍する発達障害の可能性のある児童生徒が6,5%に上ることが試算されており、今日の教育においては、発達障害に関する支援の観点は欠かせません。両相談室においても、そのような時代の要請を受け、今後さらに発達障害の領域に関する研鑽を重ねていく必要が強く求められています。

このことに関連して、当センターにおいては、今年度も文部科学省の「発達障害の可能性のある児童生徒に対する早期支援・教職員の専門性向上事業」を昨年度に引き続き3つ受託し、実施されました。発達障害早期支援研究事業（養護教育講座五十嵐哲也代表）、発達障害理解推進拠点事業（教育臨床学講座祖父江典人代表）、発達障害に関する教職員育成プログラム開発事業（教育臨床学講座三谷聖也代表）です。それぞれの成果報告に関しては、当センターのホームページにもアップしておりますので、ご覧いただくとして、ここでは当センターが発達障害分野に関して、今日的な時代の要請に応えようとしている姿勢を強調しておきたいと思えます。

また、今年度も本発達障害プロジェクト理解推進拠点事業の一環として、発達障害ミュージカル「それぞれの星の下で」の上演が、劇団インクルーシブシアター（藤井奈緒美代表）の全面的なご協力の下、2015年6月に滞りなく行われました。2回公演のそれぞれ500人定員でしたが、多くの観客に迎えられ、昨年度同様成功裏に終わりました。今回も劇という芸術表現を通じた発達障害の理解推進が、観客の皆さんのところに直に訴える力を持ち、感動を呼び起こすことがあらためて認識されました。広く一般の方々にも発達障害を理解していただくためには、通常の講演や研修のみならず、芸術的手法による啓蒙活動も今後さらに求められるのかもしれません。

なお、この3つのプロジェクトに関しては、指定校、拠点地域、拠点校、連携校として多大のご尽力をいただきました。愛知教育大学附属岡崎小学校、豊明市教育委員会、豊明市立豊明中学校、藤田保健衛生大学の関係各所の先生方には、ここにあらためて深謝の意を表したいと思えます。言うまでもありませんが、先生方のご協力が得られなければ、到底実現かなわぬプロジェクトでした。

他にも当センターの取組としては、学部生によるボランティア活動「SOBA」（教職実践講座川北稔代表）、「教育臨床カフェ」（教育臨床学講座三谷聖也代表）など、今年度も堅調な歩みを見せています。これらの活動は、センターの枠組みを超えた学内交流の活性化に大いに寄与しており、今後のさらなる展開が期待されるところです。

さて、当センターの研究相談活動は、地域の方々への社会貢献を眼目としております。ですが、昨今の時代情勢の中、愛知教育大学も年々運営費交付金の削減が必至の情勢であり、当センターも予算の維持が難しい状況にあります。年々緊縮財政が続く中、当センターの研究相談活動の質をどのように担保していくのか、難しい舵取りを強いられるところですが、今後とも当センターにかかわる教員のみならず、外部研究協力員の皆様、事務の方々、院生ともども、一層の相談活動の充実を図っていきたく思いますので、関係各機関の皆様のご支援のほど、今後ともよろしくお願い申し上げます。

2016年3月吉日

教育臨床総合センター センター長 祖父江典人